

古仏語覚え書き [II]

岡 田 真知夫

3. マントは首に吊すもの？

妻や恋人の貞節を試すというテーマ“*épreuve de chasteté*”を扱う短編に『寸法の合わないマント』(*Le Mantel mautailé*)という作品がある。一行8音節で900行余り。作者不詳。創作年代は13世紀の最初の四半世紀らしい。「寸法の合わない」(*mautailé*を直訳すれば「裁ち方の拙い」)というのは、たとえ僅かでも浮気心を抱いたことがある女性が着ると裾が伸びたり縮んだりして丁度良い寸法にならないということである。マントは妖精が作ったもので、ある乙女が使者を遣わしてアーサー王の宮廷に届けている。それが夫や恋人に最も忠実な女性を決めるゲームの道具として使われるのである。「最もよく似合う女性に進ぜよう」(*Mantel* 281-2)^①という王の言葉は、美しさに自信のある女性にとっては励ましになるはずだが、同時に己の貞潔さが試されるということを知ると後ずさりしてしまう女性がほとんどである。しかし、一番乗りで試着して失敗した王妃グニエーヴルに促され、また恋人に背中を押され、ほとんどすべての女性が着てみることになるのだが、ことごとく不首尾に終わる。結局、最後に羽織ったカラドスの恋人にのみ申し分なくフィットしたという。超自然的要素を含むブルターニュの「レ」と笑いを誘う女性蔑視のファブリオの雰囲気をあわせもつ作品である。

マントを着たり脱いだりする動作は、古仏語のテキストでは *afubler-desfubler* (*desafubler*) という動詞で表すことが多い。この作品でもその例は拾える：

(1) *Le mantel tent a la meschine*

Qui mout volentiers l'afubla. (Mantel 312-313)

「王妃がマントを差し出すと、その若い娘は喜んでそれを身に着けた」

(2) Et la dameisele le (=le mantel) prent;

Veiant les barons l'*afubla*. (*Ibid.* 408-409)

「乙女はマントを受け取り、お歴々の見守る中、それを羽織った」

ひとつ奇妙に思えるのは、同じ文脈でマントを *afubler* すると言わずに「首に吊す」*pendre au cou* と言っていることだ：

(3) La roïne premier le (=le mantel) prent,

Maintenant *a son col le pent*. (*Ibid.* 287-288)

「まず王妃がマントを手にして、それをすぐに首に吊す」

(4) Et li reis li fist aporter

Le mantel, et ele le prent,

Maintenant *a son col le pent*. (*Ibid.* 462-464)

「そして王がマントを持たせると、彼女はそれを受け取り、すぐに首に吊す」

マントが主語で受動態の文もある：

(5) (la reine:) «Encor iert... *afublé* !» (*Ibid.* 342)

「他の方々にも着ていただきますよう（直訳：マントはまだ着られるであろう）」

(6) Mès se la verité seüst

Coment li manteaus fu teissuz,

Ja a son col ne fust penduz. (*Ibid.* 290-292)

「しかし、(王妃が) その真相を知っていたなら、決してマントは彼女の首に吊されることはなかったであろう」

マントは一枚布の体をくるむ衣服で、袖などは付いていない。元来、*afubler* は、そのマントが肩からずり落ちないように留め金を掛けたり留め紐を締めたりすることを指したようだ（ラテン語基 *fibula* は「留め具」の意）。そして、その意味が拡張して「(マントを) 羽織る、着る」ことを指すようにもなったらしい。*afubler le manteau* というのはふつうにイメージが浮かぶ表現である。しかし、そのマントを「首に吊す（掛ける）」*pendre a son cou* という動作・図柄は、私にはどうも不自然に感じられる。もちろん、作者自身はまったく違和感なく「自然に」この表現を使っているのだろうが…。以下はこの違和感を私なりに和らげ

ようとした試みである。

別の作品には、動詞が *pendre* ではなく *mettre* の例もある：

(7) ... *aporta un mantel gris;*

au col au chevalier l'a mis. (Perceval 1777-1778)

「灰色の（リスの毛皮の）マントを持ってきた。そして騎士の首に掛けた」

(8) *Au col li mist bon mantel chier. (Richeut 1037)*

「(リシュールは) 上等で高価なマントを（ヘルスロの）首に掛けた」

次の例では「首から解（ほど）く（はずす）」と言っている。ということは、もとは「首に掛けていた」ということだろう：

(9) *Mout lo menacent,*

Lo mantel del col li delacent,

Tot lo despoillent. (Richeut 1302-1304)

「彼らは彼をひどく脅して、マントを首から解いて、身ぐるみ剥いでしまう」

次も「首から」脱ぐケース。「マント」*mantel* という語は使っていないが、「貂の毛皮」*pels de martre* は実質的にマントであろう：

(10) *E li quens Guenes en fut mult anguisables.*

De sun col getet ses grandes pels de martre

E est remés en sun bialt de palie. (Roland 280-282)

「伯ガヌロンは大変な苦しみようだった。首から大きな貂の毛皮を脱ぎ捨て（直訳：「投げ捨て」）綾絹のブリオー姿になる」⁽²⁾

Viollet-Le-Duc の *Dictionnaire raisonné du mobilier français*, vol. IV (1874), pp.100-131 の «manteau» の項に 29 点の図版があるが、襟元あるいは胸元あたりで唯一つのホックや一本の紐のようなもので留めているイラスト (fig.5, 6, 7, 9, 18, 28) を見ると「首に掛ける」という言い方もさほど不自然ではないかなとも思えてくる。風でもはらめば、まさに首に引っ掛かったような状態になるだろう。ただやはり、ふつうに着ている際に掛かっているのは首というよりは肩ではないだろうか。



もう一例挙げよう。やはり *mantel* という語は使っていないが、話題になっているのはマントらしい。

(11) et mes sire Gauvains s'atorne
de la robe, qui mout fu riche,
et son col d'un *fermail* afiche
qui pandoit a la *cheveçaille*. (*Perceval*, éd. Lecoy 7740-7743)

ヒルカ版も全く同じテキストである (vv.7992-7995)。フーレの現代語訳は «... et messire Gauvain se revêt de la riche robe... Il ferme son *manteau* d'une agrafe qui pendait au col.»⁽³⁾ —「襟元 (*cheveçaille*: «encolure, collet») に垂れ下がっていた」というのだから、「留め具」*fermail* は結構高い位置にあったということになる。訳文から、フーレが *robe* を *mantel* のシノニムとみなしているのは明らかである。

首の付け根あたりで一箇所のみ留めて着るとするなら、*pendre au cou* というのも不自然ではないということになるだろうか…。日本語なら「肩に引っかける」「ちよいと羽織る」というような感覚で *pendre au cou* と言っているのかも知れない。

因みに、よく見られる *cuer al ventre, cuer del ventre* という表現 — 「胸の心臓」ではなく「腹の心臓」 — から伺えるように、*ventre* は今考えられているよりも広い部位を指していたらしい。たとえば次のような例にもそのことは伺える：

(12) ...anz o vantage li est crevez

Li cuers. (1^{re} Continuation Perceval, ms.E, 5930-5931)

「心臓が彼の腹の中で破裂した」 (*anz < intus, o = en le*)

(13) ...tant se greva,

Ileoc cheï, puis ne leva:

Li quors del ventre s'en parti. (*Deus Amanz*, 213-215)

「苦しんだ果てにその場に倒れると、彼はもう起き上がらなかった。q が腹を離れたのである」(この場合 *quors* は心臓というよりも一種の生命原理を指している)

col-cou についても同じことが言えて、首の付け根から喉元・肩にかかるあたりまで含めて *col-cou* と言っていたのだろうか…。

動詞 *pendre* を用いてマントを「首に吊す」*pendre au cou* という表現は『寸法の合わないマント』にのみ拾える特殊な表現というわけではない。トブラー & ロマッチ『古仏語辞典』の *mantel* の項 (vol.V, 1094.9-1099.32) を見ると、同じ表現が別の作品に 3 例拾える。その一つは徳井氏が紹介しておられる『エムリ・ド・ナルボンヌ』のエピソード⁽⁴⁾に酷似している一節である：

(14) Un des Griens le vit defublé,

sun mantel li ad relevé,

dist li que sun mantel preïst

e a sun col le rependist;

e il respondi par noblei:

«Jeo ne port pas mun banc od mei.» (*Rou*, III, 3078)

「一人のギリシア人がマントを脱いだままの彼（ロベール）の姿に気付くと、それを拾い上げ、受け取ってまた首に吊すよう勧めたのだが、彼は高らかに答えて言った：『自分の椅子など持って行かぬ』」

彼（Robert）は「自分の（尻を乗せた）椅子など持って行かぬ」と言って、皇帝の御前で椅子代わりに床に敷いて座った自分のマントを首に「また吊す」*repandre* こともなく、気前よく置いていくのである。

トブラー&ロマッチの辞書には、*pendre* という動詞は使っていないが、もう一つ注目すべき例が拾える。3行付け足して引用する：

(15) Montent el maistre pavement;

Ne voelent c'on les tiengne a fox:

Lor mantiax ostent de lor cox,

Sor lor espaulles les ont mis.

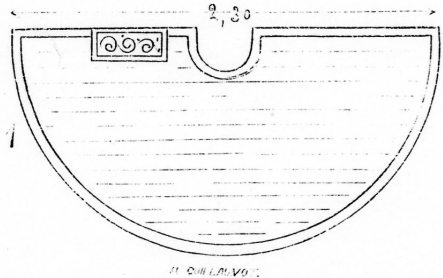
Gens ont les cors et fiers les vis. (*Guillaume de Palerne* 2576-2580)

「彼らはメインホールに登っていく。うつけ者扱いされたくないの、マントを首から外して肩に掛けた。体つきは優美で、顔には雄々しさがある」

皇帝の前に到着した使者たちの描写である。「首から外して肩に掛けた」と言っている。当然ながら、*cox* と *espaulles* は別の部位を指し示している。「掛けた」というのは、もちろん片方の肩にであろう。

マントを床に広げれば、たとえば扇子に貼った紙（あるいは布）の部分だけを残した（下の方の骨の部分を取り去った）扇形になる（*Viollet-Le-Duc, Dict. raisonné, IV, p.101, fig.1* = 下図参照）。マントを羽織るときは、短い方の曲線部（扇子なら手に近い方）＝襟部を首回りに持って行って *atache/fermail* で留めるわけだ。逆に脱ぐときは、*atache/fermail* を外してその曲線部＝襟部を首回りから離すことになる。そう考えると — つまり、着たり脱いだりする際のマントの襟部の動きに注目すると — 「首に掛ける」「首から外す」という言い方も奇異ではなくなるような気もする。*col - cou* を「首が衣服から出るところ」、首の付け根から喉元・肩にかかりそうなあたりまで含めたかなり広い部分というふうに考えると、*pendre le manteau à son cou* という表現もそれなりに合点がいく。

トリスタンの死の床に慌てて駆けつけるイズーの描写に *desafublee* という語が使われていた：



- (16) De sa mort ert si adolee
la rue vait *desafublee*
devant les altres el palés.

(Thomas 3074)

「彼の死があまりにも悲しかったので、マントも身にまとわず人よりも先に宮殿に向かっていく」

この *desafublee* がマントの留め金（あるいは留め紐）がはずれている状態ではなく、マントそのものが着られていない状態の表現であることは、徳井氏が説得的に指摘されたところである⁽⁵⁾。またフーレは、「*affubler n'indique pas nécessairement que le manteau est agrafé dès qu'il est mis sur les épaules.*」と言い、『ペルスヴァル第一統編』の次のような一節を参照させている⁽⁶⁾：

- (17) D'un chier mantel l'ont affublé,
Mais ainc au col n'en mist atache
Por rien que on dire li sache. (*I^{re} Continuation Perceval*, ms.T, 10572-4)

「人々は彼に高価なマントを羽織らせたが、彼は何と言われようとその紐を留めなかった」

これとは逆に、*desfubler* (*desafubler*) も *atache/fermail* を外すとか解（ほど）くというような狭い意味のみをになっていたわけではない。*des(a)fublez - des(a)fublee* がマントを脱いだ（着ていない）状態を表すことは、(14)に引用した『ルー物語』の一節からも明らかである。4行足してもう一度引いておこう：

- (18) sun mantel jus a terre mist,
tut *desfublez* desus s'asist;
al partir, quant d'iluec turna,
sun mantel prendre ne deigna.

Un des Griens le vit *defublé*,
 sun mantel li ad relevé,
 dist li que sun mantel preïst
 e a sun col le rependist;
 e il respundi par noblei:

«Jeo ne port pas mun banc od mei.» (*Rou*, III, 3071-3080)

「(ロベールは) おのれのマントを床に置き、その上にマントを身にまとわぬ状態で腰を下ろした。そこを辞する際にはそのマントを拾おうとしなかった。一人のギリシア人がマントを脱いだままの彼の姿に気付くと…」

フーレは、*afubler* 自体の語義は «mettre sur ses epaules ou sur celles de qqn (un mantel / un b্লাiut / etc.)» と説いている⁽⁷⁾。肩に掛けてから、あるいは羽織ってから、*atache/fermail* で襟元を固定したのだろう (*au col ...en mist atache*)。 *pendre au cou* というのは、*atache/fermail* で留めるところまでを含んだ言い方ではないだろうか。ちょっと引っ掛ける、羽織るというよりは、留め金で押さえて (留め紐を結んで) ちゃんと着るという感じではないだろうか⁽⁸⁾。

『寸法の合わないマント』では、アーサー王の宮廷の女性たちは、誰に一番よく似合うか (寸法的に一番フィットするか) 競ったわけだから、襟元を固定して「ちゃんと」着たに違いない。ペルスヴァルの恋人が着ようとした際には *ataches* が壊れてマントもろとも床に落ちてしまい、彼女は体をわなわなと震わせていた：

(19) Mès quant el le dut afubler

Les ataches en sont rompues

Et a la terre jus cheües

Avec le mantel tot ensemble.

Li cors d'angoisse trestremble. (*Mantel* 560-564)

この少し後には次のような一節もあった：

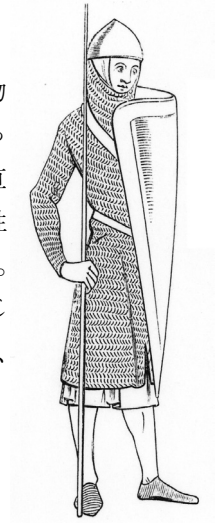
(20) «Or i estuet ataches querre,

Beaus amis!» ce li dist li reis.

Et il en i mist demaneis

Unes qu'il prist en s'aumosniere. (584-7)

王の求めに応じて「1 セット」(*unes*) の *ataches* を「施物袋」から出してすぐに取り付けたというのは、妖精が作ったというマントを持ってきた若者である。*ataches* を付け直さないと「ゲーム」を続行できなかったわけだから、女性たちは皆その *ataches* を留めて試着したということだろう。たしかに、「吊り緒」*guige* で首に掛けて携行した盾と同じように、マントも首に吊して身にまとう衣服であるなら、その紐や留め金をはずしたまま装うわけにはいかない。



註

* 引用した図版の出典：Viollet-Le-Duc, *Dictionnaire du mobilier français de l'époque carolingienne à la Renaissance*, 1874, vol.IV, pp.101, 104, 118; vol.V, p.348.

(1) 原文では間接話法になっている：

Puis li a dit et creanté

Que demaneis il le donra

A cele cui il mieus serra. (*Mantel* 280-282)

「そして王は王妃に請け合って言った。直ちに最もよく似合う女性に進ぜようと」

(2) 佐藤輝夫（筑摩世界文学大系『中世文学集1』）、有永弘人（岩波文庫）、鷲田哲夫（筑摩『世界の英雄伝説5』）、神沢栄三（白水社『フランス中世文学集1』）の四氏皆が「*de sun col*」を「肩より／肩から（さっとひっぱずし／脱ぎすて）」と訳しているのは面白い。やはり「首より／首から」は抵抗があったのだろう。

(3) Chrétien de Troyes, *Perceval le Gallois ou le conte du graal*, mis en français moderne par L. Foulet, Nizet, 1970, p.187.

(4) 徳井淑子『服飾の中世』、勁草書房、1995年、第二部「中世服飾の象徴性」第一章「マントの慣習 —『トリスタン』物語の一節をめぐる—」、93頁。

(5) 前掲書、90-91頁。

(6) *The Continuations of the Old French Perceval of Chrétien de Troyes*, ed. by W. Roach, vol.III, part 2: *Glossary of the First Continuation*, by L. Foulet, The American Philosophical Society, 1955 (reprinted 1970), p.6.

(7) L. Foulet, *loc.cit.*

(8) 徳井氏は「マントは、ウールに毛皮を張るためにかなりの重量をもち、しかも円

や半円の形のない衣服であるから、留め金はずしたまま肩で支えるというのはかなり難しいと思う」と述べておられる（前掲書、91頁）。

4. 愛の結び目

歌物語『オーカッサンとニコレット』の散文部分に次のような一節がある：

Ne quidiés mie que les ronces et les espines l'esparnaiscent. Nenil nient ! ains li desronpent ses dras qu'a painnes peust on nouer desu el plus entier, et que li sans li isci des bras et des costés et des ganbes en quarante lius u en trente...
(*Aucassin*, éd. Roques, XXIV, 2-6)

行方不明になってしまった恋人のニコレットを探して森の中を馬で進んで行くオーカッサンの様子を描いているところである。ここを神沢栄三氏は次のように訳しておられる。—「茨や棘が彼を大目に見てくれたなどは考えないでいただきたいものです。いな、それどころではありませぬ。着ていた衣服はずたずたに引き裂かれて、最も裂け方の少ない布で結び目をつくるにも骨が折れるほどでありましたし…」⁽¹⁾—「最も裂け方の少ない布で結び目をつくる」というのは一体どういうことなのか？いかなる含みがあるのだろうか？幾つかの現代語訳を見ると、この箇所は次のようになっている：

N'allez pas vous imaginer que les ronces et les épines l'épargnent. Pas le moins du monde ! Bien au contraire, elles lui mettent en pièces ses vêtements à un point tel que l'on aurait eu beaucoup de peine à faire un nœud avec le morceau le moins déchiré. (J. Dufournet, GF-Flammarion, 1973)

Ne croyez pas qu'il soit épagné par les ronces et les épines ; au contraire, elles déchirent ses vêtements dont on pourrait faire difficilement un nœud avec le morceau le moins lacéré. (A. Micha, GF-Flammarion, Collection Etonnants Classiques, 1997)

Ne croyez pas que les ronces et les espines l'épargnassent. Pas du tout, mais

elles lui déchirent ses vêtements au point qu'à peine pût-on faire un nœud avec ce qu'il en restait de plus intact ... (G. Cohen, Champion, 1972)

原文の *desu* は副詞と見れば「上から」あるいは「上に」、*el plus entier* は「もっとも綻（ほころ）び・引き裂きの少ない箇所」に「à l'endroit le moins endommagé」(*el* = *en le*) と考えられる⁽²⁾。デュフルネ、ミーシャ、コーエンの3者とも *desu* を無視し、前置詞 *en* を無理矢理 «avec» の意味に解しているように思える。その点は神沢氏の解釈も同様である。手元にある仏語訳では、M.-F. Notz-Grob, *Nouvelles courtoises occitanes et françaises* (Collection «Lettres Gothiques», 1997, p.675) の «Mais elles (= les ronces et les épines) lui déchirent ses vêtements si bien qu'on aurait eu de la peine à faire tenir un nœud sur le plus entier.» が最も原文に即しているような気がする⁽³⁾。ただ、衣服の上に結び目を付けるとするのは一体どういうことなのか、何かのおまじないなのか、M.-F. Notz-Grob 氏はそのへんをどう考えて訳しているのか明らかにしていない。

nouer を「縫う」「*coudre*」「繕う」「継ぎ当てをする」「*rapiécer, rapétasser, raccomoder*» という意味に解するなら⁽⁴⁾「茨や棘はかれの衣服をずたずたに引き裂き、もっともまともに残った箇所においても、その上から（その上に）継ぎ当てをすることは、容易ではなかっただろう」と訳せるだろうか。「まともに残った箇所」（＝破れていない箇所）に継ぎ当てをする必要があるだろうか？と屁理屈をこねたくなるが、「最もまともな状態が残った部分」*le plus entier* でさえ実は「まとも」とは言い難い状態だった、服全体がどうにも繕いようがないほど散々に引き裂かれていた、と言いたいのだろう（← *a painnes* と最上級 *le plus entier* の相関）。しかし、*nouer* の意味はやはり「nœud（結び目）を作る」と解するのが自然である。トブラーは *nouer* を *naier*（「樽の穴を塞ぐ」→「継ぎ当てをする」「繕う」）と読み替えて解釈を試みているようだが⁽⁵⁾、やはり写本のままでテキストを読む可能性を探りたい。

ガストン・パリスは、自らが原文テキストと序文を寄せたビーダの訳に賛意を示している：«Le sens indiqué par Bida : “au point qu'on pourrait à peine faire un nœud avec ce qui en reste à l'endroit le moins endommagé,” me paraît acceptable.» — 加筆になる “avec ce qui en reste” を除けば原文に沿った素直な

訳である。パリスはさらに「他にも似たような言い回しの例にたしか出会ったことがある」*«je crois bien avoir rencontré d'autres exemples d'une locution analogue.»* と付け加えているのだが、その具体例は挙げていない⁽⁶⁾。挙げていれば、結び目をつくることの意味についてなにか手掛かりが得られたかも知れないのだが…。

私がチェックできた限りでは⁽⁷⁾、衣服の一部に結び目を付けることの意味（その行為が示唆するもの）についてとくに注を付けている校訂者や訳者がいないということは、皆その結び目は単なる小さなものの代名詞に過ぎないと考えているからだろうか。結び目というものはそもそも小さなものだけれども、その小さな結び目をその上に付けられる程度の僅かな無傷のスペースさえ残らなかった、それほどずたずたに引き裂かれてしまった… 面白味に欠ける解釈である（少なくとも私にはそう思える）。

一つ思い浮かんだことがある。マリ・ド・フランスのレ『ギジュマール』にあったエピソードだ。別れ別れにならざるを得ないことを悟ったギジュマールとその恋人の奥方は、一風変わったことをしていた。ギジュマールは奥方に貞操帯のようなものをつけ、奥方は彼の服の裾に「結び目」*plait* を作っていたのである。*nouer* という動詞は使っていないが（「結び目」を指す *plait, pleit, plet* に対応する動詞は v.731 *pleier*）、やはり *desuz* と *en* が使われている点も注目される⁽⁸⁾：

– Amis, de ceo m'aseürez!
Vostre chemise me livrez;
El pan desuz ferai un plait:
Cungié vus doins, u ke ceo seit,
D'amer cele kil defferat
E ki despleier le savrat. (Guigemar 557-562)

「愛しい人、そのあかしを下さいな。あなたのシャツを貸して頂戴。その裾の上に結び目を付けて差し上げましょう。どこでも、その結び目をほどこいて外せる女性なら愛して構いません」

これは奥方のせりふである。v.557 の *ceo* は他の女性からは「悦びも安らぎも」(*joie ne pes*) 決して得るまいという直前のギジュマールの言葉を受けている。周

知のように、その後再会した折りに、それまでいかなる女性にもほどけなかったその結び目を奥方自身がほどいたのだった。この「結び目」は、恋愛における忠誠の誓い、変わらぬ愛の保証を形象化していると言えるのではないだろうか。いや、愛の占有・「浮気」の予防と言った方が正確かも知れない。

そこここに武勲詩やロマン・クルトワのパロディーあるいは「もじり」めいたところがある『オーカッサン』である。作者・語り手は「色男も形無しだった」というような含みで、「その服は（『ギジュマール』の主人公が付けていたような）愛の結び目を付けられる箇所もないほどにずたずたに引き裂かれ、見るも無惨な姿だった」と言っているのではないだろうか。こう考えると、少なくとも *nouer* という動詞自体に無理な解釈をほどこす必要はなくなる。

註

* ここで扱った問題が存在すること自体を教えてくださいました愛知県立大名誉教授鈴木覚氏と、ドイツ語の解釈を手伝ってくださった東京都立大の元同僚小竹澄栄氏に、この場を借りて感謝申し上げたい。

- (1) 新倉俊一・神沢栄三・天沢退二郎訳『フランス中世文学集3』、白水社、1991年、143頁。
- (2) 抜粋を掲載している K. Bartsch, *Chrestomathie de l'ancien français (VIII^e-XV^e siècles)*, Vogel, 12^e éd. par L. Wiese, 1927 のグロセルを参照。
- (3) A. Pauphilet によるアンソロジー *Poètes et romanciers du Moyen Age* (Gallimard, 1952)の脚注(p.473, n.2)に読める解釈もほぼ同様である：«On n'aurait pas trouvé sur le plus intact la place de faire un nœud.» ついでながら、川本茂雄氏（岩波文庫）の「上から縫合せきれぬ程にその腕（かいな）を引裂き…」は、原文の *dras* を *bras* と勘違いした訳であろう。
- (4) Bartsch, *Chrestomathie* がグロセルでこの箇所のこの語に宛てている語義は «coudre»。やはりこの箇所を含む『オーカッサン』の抜粋を掲載している L. Constans, *Chrestomathie de l'ancien français (IX^e-XV^e siècles)*, Welter, 3e éd., 1906 は «nouer, attacher» に加えて «raccomoder» という意味を挙げている。
- (5) トブラーの訳：«dass man kaum an der am wenigsten schadhafte Stelle einen Fleck darauf hätte setzen können.» 「もっとも傷みの少ない箇所でもほとんど継ぎをあてられなかっただろう」(cité par G. Paris, *Romania*, VIII, 1879, p.293.)
- (6) *Romania*, VIII, 1879, p.293. パリスとビーダの本： *Aucassin et Nicolette*,

chantefable du XII^e siècle, traduite par A. Bida; révision du texte original et préface par G. Paris, Hachette, 1878.

- (7) 傑作の誉れ高い『オーカッサン』には翻訳も校訂版も数多く出ている。私が生かすすべてに目を通してはいるわけではないことは、断っておかなければならない。
- (8) 『ギジュマール』の校訂者 Rychner はグロセールで *pleit, plait, plet* に «nœud»、*pleier* に «nouer» という語義を与えている。また、A. Ewert は前者に名詞の «knot」、後者に動詞の «to knot» をあてている (Marie de France, *Lais*, edited by A. Ewert, Blackwell, 1976)。

[引用テキスト] (前稿「古仏語覚え書きII」に記載したものは繰り返さない。)

Aucassin: Aucassin et Nicolette, éd. M. Roques, Champion, CFMA, 2e éd., 1975.

Deus Amanz: in *Les Lais de Marie de France*, éd. J. Rychner, Champion, CFMA, 1971.

Guigemar: in *Les Lais de Marie de France*, éd. J. Rychner, Champion, CFMA, 1971.

Guillaume de Palerne, éd. H. Michelant, SATF, 1876.

Mantel: F.-A. Wulff, «Le conte du *Mantel*, texte français des dernières années du XII^e siècle, édité d'après tous les mss.», in *Romania*, XIV, 1885, pp.343-380.

Perceval: Christian von Troyes, *Der Percevalroman (Li contes del graal)*, éd. A. Hilka, Niemeyer, 1932.

1^{re} Continuation Perceval: The Continuations of the Old French Perceval of Chrétien de Troyes, vol.I: *The First Continuation* – Redaction of Mss TVD, ed. by W. Roach, American Philosophical Society, 1949 (reprinted 1965), vol.II: *The First Continuation* - Redaction of Mss EMQU, ed. by W. Roach and R.H. Ivy, 1950 (reprinted 1965).

Richeut: Richeut, édition critique avec introduction, notes et glossaire par P. Vernay, Franke, 1988.

Roland: La Chanson de Roland, texte établi d'après le manuscrit d'Oxford, traduction, notes et commentaires par G. Moignet, Bordas, 1969.

Rou: Wace, *Le Roman de Rou*, éd. A.J. Holden, 3 vol., SATF, 1970-1973.

Thomas: Thomas, *Le Roman de Tristan*, éd. F. Lecoy, Champion, CFMA, 1991.